



工房前の石垣で



壁にかかっている色とりどりの毛糸の色見本

山染紡のセーター

工房の表札

メンバーのみなさん  
製品のセーターを着てにっこり

体や環境によいものを使って製品をつくっています。

山染紡の毛糸はその色も魅力のひとつ。山染紡では地元奥多摩で採れる草木を染料に、丁寧に洗い揃えた原毛をその都度染めています。染料として使用される草木はヨモギや梅、藍、いら草、びわ、ヤマアカネ、バラやマリーゴールド、栗など実に様々。これらは媒染液(染料をしっかり繊維につけ、より発色させるための液)によっても発色が変わり、さらにその日の気温や湿度、季節、染料の状態によっても発色の度合いが変わるそう。「本当に染色は奥が深くて・・・同じ色はまず出ません。」とおっしゃいます。さらにどこか一行程でも気を抜いて作業してしまうとそれが色に出てしまうようで、「最初から最後まで本当に気が抜けないのよ〜!」という言葉からも、それが大変な作業だということがわかりました。そんな草木染めですが、購入する側の人間としては色落ちが気になるところ。聞くと、それももちろ

ん研究済みで、「(壁に掛かっている毛糸の色見本を指さして)そこにかかっている毛糸は染めてから10年以上経っています。時間が経つとすこし色が薄くなったかなと思うくらいで、ほとんど色は変わりません。やはり買って頂く製品ですから、洗っても色落ちの少ない染材料を使って染めています。」とのこと。壁の色見本は、昨日今日染めたと言っても不思議ではないほど、きれいな色を見せています。「草木が染材料ですので体や環境にもやさしいんです。」といいます。丁寧に丹念に、環境にも配慮したものづくりの姿勢には製品に対する深い愛情が感じられます。まず自分達が愛せる製品を作り、購入者にも愛される製品を作る。この製品たちは愛されながら生まれてきているんですね。それを示すかのように山染紡の毛糸たちはとてもやわらかな優しい色合いです。

続けられるのは、作るのが楽しいから。

山染紡のみなさんは普段も工房に集まって制作されているのでしょうか? 「仕事をしている人もいるし、ほとんどみんな紡ぎ車が家にありますから制作は各自自宅で、ゆっくり自分のペースで制作しています。ノルマもないので、やめていく人も少ないんです。ここに集まるのは月に2度くらいで、今後出店するイベントのことでか、制作したもの(毛糸やセーター)を持ってきて、仕上がりやデザインなどを全員で見ても製品として出せるか決めていきます。」といいます。メンバー全員が目製品をチェックし、討論することで山染紡の製品としてのレベルを常に高く保ち、また、そこには『山染紡』というブランドの製品を作っている、という高い意識と誇りもあります。糸として良いか? 編んで良いか? 作品としてよ

いか? 毛糸は原毛1kg紡いでも太さが均一であること、誤差は10%以内であるか? 等々。このような厳しいチェックをかいぐり、山染紡の製品として認められた製品は会が会員から仕入れて販売を行っています。製品の売り上げは山染紡の運営費として充てられ、売れたことで制作者個人の収入にはならないそうです。営利目的ではなく、あくまで会が運営していければ良い、といいます。ここまで徹底したものづくりに対する真摯な姿勢、さらに営利目的ではない…頭が下がる一方です。愚問かもしれない、と思いつつもやはり聞いてしまいました。どうして続けられるんでしょう? 「やっぱり楽しいんでしょうね。作るのが楽しいんです。」それは物を作る上で一番大切で、よけいな物を削ぎ落としたシンプルな気持ち、光り輝く原点なのですね。その言葉に目がくらむ思いでした。